

# 「ネヴァ河の幻」の変容

——『弱い心』から『罪と罰』へ——

松 本 賢 一

## 序

ドストエフスキイの『罪と罰』（1866年）第2部第2章で、主人公ラスコーリニコフがネヴァ河に架かるニコラエフスキイ橋に佇む場面は、かつて小林秀雄をして「ボオドレエルの叙情詩の精髓を感じずる」と言わしめたことのある、小説中極めて詩的な、しかしそれゆえに解り難い場面である。この場面に関しては、1847年に26歳の作者によって書かれた中篇『弱い心』の結末部分において、登場人物の一人であるアルカーヂイが、ネヴァ河の畔で幻を見る場面に淵源を持っているということがしばしば指摘される。やや厳密な言い方をすれば、『弱い心』で描かれた「ネヴァ河の幻」の場面は、13年後の1860年に『ペテルブルグの夢——詩と散文による』（以下『ペテルブルグの夢』と記す）と題されたフェリエトン<sup>2)</sup>の中でもう一度繰り返され、更にその6年後、『罪と罰』の中に取り入れられたのである。

確かに、『弱い心』や『ペテルブルグの夢』で描かれた「ネヴァ河の幻」と『罪と罰』で描かれたニコラエフスキイ橋上の場面には似通ったところが多い。『罪と罰』の9年後に執筆された『未成年』<sup>3)</sup>においても主人公に同様の経験を語らせていることを考えれば、「ネヴァ河の幻」はドストエフスキイの好んだモチーフであったと言えるだろう。

しかしながら、『罪と罰』第2部第2章のこの場面が『弱い心』の似通った場面を原型にしているという指摘は、しばしば指摘のみに留まるか、作品を離れた抽象的な都市論などに終わってしまう。<sup>4)</sup>ラスコーリニコフのニコラエフスキイ橋上での体験は、飽くまでも小説『罪と罰』の一部である。それが『弱い心』に淵源を持つとしても、『弱い心』で書かれたことが、また、『ペテルブルグの夢』で描かれたことが、『罪と罰』という作品の磁場の中ではどのような変容を蒙っているのか、『罪と罰』のテーマにどのような関りを持っているのかに言及しなければ、それは『罪と罰』の中の「ネヴァ河の幻」を読んだことにはならない。

本稿では、『弱い心』で初めて描かれた「ネヴァ河の幻」が、『ペテルブルグの夢』で再び取り上げられた事の意味を跡付け、その上で、この不思議な体験が殺人者ラスコーリニコフのものとして『罪と罰』の中に取り入れられることによってどのような変容を蒙り、どのような機能を担っているのかを考察する。その過程で浮かび上がって来るのは、『罪と罰』の構想段階から、作者ドストエフスキイがこの作品で表現したかったことのひとつ、すなわち殺人者の心理には如何なる現象が生じるか、ということに他ならない。

## 1. 『弱い心』における「ネヴァ河の幻」

1847年の年末、26歳のドストエフスキイによって執筆され、翌1848年の「祖国雑記」1月号に掲載された『弱い心』は、『白夜』（1848）などと同じく、ペテルブルグという都市に特有のタイプ「夢想家」（мечтатель）の登場する小説であり、1847年の前半に立て続けに書かれた『ペテルブルグ・フェリエトン』と深い繋がりを持った作品である。<sup>5)</sup>

舞台は大晦日から正月にかけてのペテルブルグで、主な登場人物は同じ役所に勤め、ひとつ下宿に共同生活をしている二人の若い下級官吏、ヴァーシャとアルカーヂイである。ヴァーシャは低い階層から身を起し、生まれつき身体にハンディキャップを持ちながらも、ただただ自らの努力によって現在の地位にまで昇って来た。彼は極度に内気で、周囲の人々が自分に寄せてくれる愛情や親切に対して、自分は何も返礼出来ないでいるということを絶えず気に病んでいる。自分が幸福になる時には、皆と一緒に幸福になってほしいと願うヴァーシャは、初期のドストエフスキイ作品に類出するタイプの夢想家のひとりであると言える。一方、アルカーヂイの方は、感激屋ではあるが、現実生活というものを冷静に、しっかりと見据える事の出来る青年として描かれている。ただしこれは計算高い現実家という意味ではない。アルカーヂイは粗暴でがさつなところこそあるものの、子供じみた茶目っ気を持ち合わせ、陽気で善良で、面倒見の良い人物なのである。性格の上で対照的なこの二人が共同生活を営む上で、自然アルカーヂイはヴァーシャの庇護者のような立場に立っている。

大晦日に、ヴァーシャはかねてから恋していたリーザという娘とついに婚約する事に成功する。幸福の絶頂にあるヴァーシャを見て、アルカーヂイもまた心からなる幸福を覚え、二人の前途を祝福するのだが、ここにひとつ心配事があった。浄書の得意なヴァーシャは上司のユリアン・マスタコーヴィチから時折特別の浄書仕事を頼まれ、その謝礼として臨時収入を得ていたのだが、3週間前にもノート6冊分の浄書を頼まれていたにも拘らず、リーザとの恋に浮かれて殆ど手を付けていなかった。期限は1月2日、翌々日である。ユリアン・マスタコーヴィチのこれまでの愛顧を裏切って、折角手に入れようとしている幸福を自分は台無しにしてしまうかも知れないという不安に取り憑かれたヴァーシャは、それでなくとも遅れている浄書仕事にいいよ手が付かなくなってしまう。アルカーヂイの制止も聞かず、ユリアン・マスタコーヴィチ宅に年始に出掛けたり、リーザの家を訪問しようとしたりするヴァーシャは、果てはインクの付いていないペンを紙の上に走らせたりするほどに惑乱する。彼の「弱い心」は段々と狂って行き、遂には、依頼された仕事を期限通りに終えられなかった為に、自分は兵隊にやられてしまうのだという妄想に取り憑かれ、役所の同僚たちの見ている前で顛狂院に送られてしまう。アルカーヂイはユリアン・マスタコーヴィチに、ヴァーシャの発狂を「感謝のゆえ」であると説明するが、むしろこの時期のドストエフスキイが繰り返し描いた悲劇、内面と外面のバランスが取れず、現実生活に適応できない夢想家の悲劇を、ヴァーシャもまた演じたのだと言える。<sup>6)</sup>

親友のヴァーシャが顛狂院送りになった日、勤務を終えたアルカーヂイは、ヴァーシャの短い間の許婚であったリーザの住むコロムナに立ち寄り、その帰途、ネヴァ河の畔で幻を見るのであ

る。

(……) アルカーヂイが自宅への道を辿っていた時には、既にすっかり暗くなっていた。ネヴァ河に近付くと彼は、ほんの少しの間立ち止まり、河に沿って、煙ったような、凍てきってくすんだ遠方へと、霧がかった空に映え残る、血塗れたような夕映えの最後の赤紫色で不意に燃え始めた遠方へと突き刺すような視線を投げた。凍結した雪のせいで膨張したネヴァの果てしない河面の全体が、太陽の最後の照り返しを受けて、幾万とも知れぬ針のような霜の火花にまぶれた。凍てはマイナス20度に達しつつあった。へとへとになるまで駆り立てられた馬や走っている人たちの身体からは凍った湯気が立ち昇っていた。凝縮した大気はほんのちょっとした音にも震えた。そして、両河岸のありとあらゆる屋根からは、まるで巨人のように煙の柱が立ち昇り、冷たい空を途中で縫れたり離れたりしながら上がって行きつつあった。それゆえに、新しい建物が古い建物の上に聳え立ち、新しい町が空中に出来上がって行くかと思われた……そして遂には、この世界全体が、強者も弱者も含めて、住人すべて共々に、貧者の侘び住まいであろうが金殿玉楼——この世の強者たちの喜びである金殿玉楼——であろうが、そのすべての住居も共々に、この黄昏時には、幻想的で魔法のような幻に、夢に似通ったものとなり、その夢は夢ですぐに消え去り、藍色の濃くなった空の方へと雲散霧消してしまうかのようであった。

ある奇妙な思いが、哀れなヴァーシャの、独りぼっちになってしまったこの友人を訪れた。彼は身震いした。そして彼の心は恰かもこの瞬間に熱い血潮の泉に満たされたかのようであった。それはある力強い、だがそれまで彼の知らなかった感覚の高揚の為に不意に涌き立った血潮であった。彼は恰かも今この時になって漸く、この胸騒ぎの一切を理解し、彼の可哀想な、自らの幸福に耐えることが出来なかったヴァーシャがなぜ発狂したのかを知った。彼の唇は震え始め、双眸は燃え上がった。彼は蒼褪めた、そしてこの瞬間にある新しいことを洞察したかのようであった……

彼は退屈で陰気になり、持ち前の陽気さをすっかり失ってしまった。(……)

< 2—47～48 >

ピョートル大帝の欧化政策によって沼沢地の上に人工的に建設された都市ペテルブルグの幻想性、いつかはこの壮麗な都市も幻のように消え去ってしまうのではないかといった存在感の希薄さ、等々の言葉でこの一節は説明することも可能であろう。しかしながら、この一節が夢想家を扱った小説『弱い心』の結末部分である事の意義を考えるならば、ここで読み落としてはならないのは、夢想家ヴァーシャとアルカーヂイの相違なのである。

しばしば誤解されることだが、ネヴァ河で幻を見たとはいえ、アルカーヂイは決して夢想家ではない。このことは作品の中でも明言されている<sup>7)</sup>。またアルカーヂイは、親友を見舞った悲劇をことなく収める為に、次から次へと現実的な善後策を考え出している。彼は現実生活への不適応者などではなく、むしろ柔軟な生活者なのである。ヴァーシャを失ったアルカーヂイの眼に、たとえ幻の空中都市が映ったとしても、この世の全体がやがては空中に雲散霧消してしまうように思えたとしても、それは一時のことである。彼はこのような幻視をもたらずペテルブルグという都市の魔力が、ヴァーシャのような「弱い心」の持ち主にどういう作用を及ぼすかを知り、この

都市ゆえに自分の心の中に生じている「胸騒ぎ」を「理解」（понимать）する。彼はこのネヴァ河の幻に目眩まされているのではなく、むしろ逆にこの幻を通じて「ある新しい事」を「洞察」（прозреть）したのである。外なるものと内なるものが均衡を保ち得ず、「本当の、現実の世界におけるあらゆる技術、あらゆる感覚を失った」（『白夜』の主人公の言葉<2—118>）夢想家を産み、破滅へと導くものの正体を、この時のアルカーヂイはネヴァ河の幻の中に発見したと言える。その結果として性格が一変し、「退屈で陰気になり、持ち前の陽気さをすっかり失ってしまった」としても、そのことはアルカーヂイ自身が夢想家になった事を意味してはいない。「ネヴァ河の幻」を契機として、アルカーヂイは夢想家ヴァーシャとは全く違った道を歩み始めるのである。<sup>8)</sup>

## 2. 『ペテルブルグの夢』における「ネヴァ河の幻」

『弱い心』でアルカーヂイが見た「ネヴァ河の幻」は、13年後、シベリア流刑から帰ったドストエフスキイが兄と共に発行した雑誌「時代」の創刊号に掲載されたフェリエトン『ペテルブルグの夢』の中でほぼそのままの形で使用された。このフェリエトンは元々 Д. Д. ミナーエフに依頼されたものであったが、出来上がった原稿がドストエフスキイの気に入らず、文中に挿入されている詩の部分のみミナーエフのものを残して、散文部分だけをドストエフスキイ自身が倉皇のうちに書き下ろしたものである、という。<sup>9)</sup> その内容は、フェリエトンの性質上、多岐にわたっているが、「ネヴァ河の幻」の前後に限って言えば、ドストエフスキイ自身の伝記的要素が極めて濃い。処女作『貧しき人々』製作に取り掛かる以前の、シラーやホフマンに夢中になっていた自分の、いわば「夢想家」時代とその終焉を、彼はここで振り返っていると言えよう。<sup>10)</sup>

（……）今でも覚えているが、ある冬、1月の夕刻に私は、ヴィボルグ区から自宅に向かって急いでいた。当時私はまだ実に若かった。ネヴァ河に近付くと私は、ほんの少しの間立ち止まり、河に沿って、煙ったような、凍てきつてくすんだ遠方へ、靄深い空に映え残る、夕映えの最後の赤紫色で不意に燃え始めた遠方へと突き刺すような視線を投げた。凍結した雪のせいで膨張したネヴァの果てしない河面の全体が、太陽の最後の照り返しを受けて、幾万とも知れぬ針のような霜の火花にまぶれた。凍てはマイナス20度に達しつつあった……疲れた馬や走っている人たちの身体からは凍った湯気が立ち昇っていた。凝縮した大気はほんのちょっとした音にも震えた。そして、両河岸のありとあらゆる屋根からは、まるで巨人のように煙の柱が立ち昇り、冷たい空を途中で纏れたり離れたりしながら上がって行きつつあった。それゆえに、新しい建物が古い建物の上に聳え立ち、新しい町が空中に出来上がって行くかと思われた……そして遂には、この世界全体が、強者も弱者も含めて、住人すべて共々に、貧者の侘び住まいであろうが金殿玉楼であろうが、そのすべての住居も共々に、この黄昏時には、幻想的で魔法のような幻に、夢に似通ったものとなり、その夢は夢ですぐに消え去り、藍色の濃くなった空の方へと雲散霧消してしまうかのようであった。ある奇妙な考えが私の中で頭をもたげた。私は身震いした。そして私の心は恰かもこの瞬間に熱い血潮の泉に満たされたかのようであった。それは強大な、しかしそれまで私の知らなかった感覚の高

揚の為に不意に湧き立った血潮であった。私は恰かもこの瞬間に、それまで私の中でただ蠢くばかりでまだその意味を理解出来なかった何かを理解したかのようであった。ある新しい何か、私には未知で、何かある不明瞭な聴覚で、何かある神秘的な印によってそれと知れていた新しい世界を洞察したかのようであった。

私は正しくあの瞬間から私の存在が始まったのだと考えている……（……）〈19—69〉

『ペテルブルグの夢』のこの一節が『弱い心』における「ネヴァ河の幻」を引き写したものである事は、両者を比較すれば一目瞭然であろう。単に同じモチーフを繰り返し使ったという程度のものではない。主語の「彼」（アルカーダイ）を「私」に、つまりは三人称叙述から一人称叙述に置き換え（従ってこの主語を指す代名詞や、動詞の語尾などには異動が生じる）、若干の修飾語をほぼ同義の言葉に置き換えただけで、後は全く同じ文章なのである。<sup>11)</sup>記憶に頼って書いたという可能性も無くはないが、このように完全なテキストの一致を実現する為には、このフェリエトンを執筆する際に、ドストエフスキが若き日の旧作『弱い心』を座右に置き、これを参照しながら書いたのだと推測するのが至当であろう。<sup>12)</sup>13年の時をおいて、主語のみを変えた全く同じ文章を別作品の中で反復し、それを公けにするというのは、作家として尋常の行為ではない。

ここで注意しなければならないのは、冬の夕刻のネヴァ河畔で幻視される、空中へ雲散霧消する都市の描かれ方が全く同じであるように、「ネヴァ河の幻」を見たアルカーダイと「私」の心に同様の変化が生じているということ、否、同様の変化が生じているように描かれている（引用文中粹で囲んだ部分）ことである。夢想家ヴァーシャを発狂させたペテルブルグという都市の一種の魔力を、そしてそれを感じ取っている自身の「胸騒ぎ」のよって来るところを「理解」し、「ある新しい事」を「洞察」したアルカーダイの体験は、『ペテルブルグの夢』では「私」による「それまで私の中でただ蠢くばかりでまだその意味を理解出来なかった何か」の「理解」、「ある新しい何か、私には未知で、何かある不明瞭な聴覚で、何かある神秘的な印によってそれと知れていた新しい世界」の「洞察」として描き直されているのである。ここで「それまで私の中でただ蠢くばかりでまだその意味を理解出来なかった何か」が、アルカーダイの「理解」した「胸騒ぎ」をより詳しく説明したものだと思えるならば、「私」の洞察した「新しい世界」とは、アルカーダイの「洞察」した「ある新しいもの」と同一のものだと言い得るだろう。いわば「ネヴァ河の幻」を前にして、アルカーダイと「私」はその「理解」と「洞察」を同じくしているのである。

先に述べたように、『ペテルブルグの夢』の「私」が語る一連の昔語りには、作者自身の伝記的要素が濃く、特にこの「ネヴァ河の幻」の周辺は、彼が作家として新たな題材と手法を獲得して行く時期の経験として書かれている。そのことだけを理由に作者ドストエフスキ自身と語り手の「私」を同一視することにはもちろん危険が伴うが、このフェリエトンを書いた時のドストエフスキが、13年前、アルカーダイの体験として『弱い心』の中に定着させた「ネヴァ河の幻」を、同じテキストを再利用して若き日の自身の体験として描き直したのだという推測はあながち無理なものとは言えないだろう。あの時、心弱い夢想家の友人ヴァーシャとは一線を画し、「ネヴァ河の幻」に、ペテルブルグという都市のあやかしに惑わされることなく、新しい世界を洞察し得たアルカーダイとは、実はこの自分の事だったのだ——『ペテルブルグの夢』の中で、

ドストエフスキイはこう告白しているのである。この告白は、読者に対する単なる種明かしではない。流刑地シベリアからようやく帰京し、再び本格的に作家活動を開始しようとするその出発点で、兄と共に発行する雑誌の創刊号を好箇の場所として行われた、作家として拠って立つべき地盤の確認作業でもそれはあった。上の引用文中最後の「私は正しくあの瞬間から私の存在が始まったのだと考えている」という言葉には、ドストエフスキイの並々ならぬ自負が隠されている。そしてその自負の裏打ちとなっているのが、かつて、作家としての出発点で、「新しい何か」、「新しい世界」を自分は「理解」し、「洞察」し得たのだという思いなのである。

### 3. 『罪と罰』における「ネヴァ河の幻」の変容

1865年の夏から秋に構想され、1866年の1年間「ロシア報知」誌上に掲載された『罪と罰』の主人公ラスコーリニコフにも、ドストエフスキイは「ネヴァ河の幻」を体験させた。しかし『ペテルブルグの夢』を書いた時に用いた手法——古いテキストの再利用——を彼はもはや用いてはいない。背景となる季節も冬から夏に変わっている。

犯行の翌日、友人のラズーミヒンを訪問した帰り道で、ラスコーリニコフはニコラエフスキイ橋にさしかかり、馬車に轢かれそうになった。その貧しい風体のゆえに当たり屋と間違えられたラスコーリニコフは鞭で打たれ、これを見ていて同情した母娘連れから20コペイカを恵まれる。

(……)彼は手に20コペイカ玉を握り締め、10歩ほど進むと顔をネヴァ河の方へ、宮殿の方向へと向けた。空には極く小さな雲も無く、水はネヴァ河には実に珍しいことに殆ど青色をしていた。礼拝堂まで20歩ほども歩けば足りる橋上のこの場所から眺める時、その輪郭が最もくっきりと見える寺院の円屋根は、ひときわ光り、澄んだ空気を通してその飾りの一つ一つさえもが見てとることが出来た。鞭の痛みは治まっていたし、それにラスコーリニコフも打たれたことは忘れてしまっていた。ある不安な、そして完全には明瞭でない考えが、今、専ら彼の心を占めていた。彼は立ったまま遠方を長いことじっと見ていた。この場所は彼には特に馴染みがあった。彼が大学に通っていた頃によく、恐らくは百回ほどもあったことだが——帰宅の途中であることが最も多かった——他ならぬこの場所に立ち止まり、このまことに壮麗なパノラマにじっと目を凝らしては、彼はその都度自分の受けるぼんやりとした解き難い印象に驚きに近いものを覚えたものであった。この壮麗なパノラマからは、説明し難い冷気が彼にいつも吹き付けて来るのだった。彼にとってこの豪華な光景は、啞で聾の靈で満ち満ちていた……彼は毎度毎度自分の陰気で謎めいた印象に一驚し、この印象の謎解きを、自分がそれを解けるだろうとは思わぬままに、将来へと先延ばししていたのだった。今不意にはっきりと、これらの自分の疑問や不審を思い出し、今それらについて自分が思い出したのは偶然ではなかったという気がした。自分が以前と同じように同じ場所に立ち止まったということ、そして恰かも、自分が以前と同じように今も同じことを考えることが出来、つい最近まで興味を持っていたのと同じ、以前のテーマや情景に興味を持つことが出来るのだなどと本当に思ったのだということ——そのことだけをとりても、彼には奇妙で不思議なこと

に思われたのである。滑稽にさえ感じるところであったが、それと同時に彼は痛いほど胸が締め付けられた。下の方のどこか深いところに、足の下の漸く見えるところに、今、彼には見えるように思われた、以前の過ぎ去ったこと的一切合財が、以前の課題も、以前のテーマも、以前の印象も、このパノラマの全体も、彼自身も、何もかも、何もかも……彼には自分がどこか上の方へと飛んで行きつつあり、そして何もかもが、彼の眼には、消えて行きつつあるような気がした……思わず片手を動かして、彼は不意に自分の拳の中に握り締めた20コペイカ玉を感じた。彼は手を開き、じっとその金を見、腕を大きく振って金を水の中に投げた。それから踵を返して家路についた。この瞬間自分自身を、すべての人、すべての事から、われから鉄で切り離れたように、彼には思われた。(……) <6—89~90>

季節の相違、河岸にいるか、橋上にいるかという場所の相違などは見られるものの、また、「説明し難い冷気」<sup>13)</sup>、「啞で聾の霊」などといった特異な言い回しこそあるものの、この場面が『弱い心』や『ペテルブルグの夢』の「ネヴァ河の幻」と極めて似通ったものを持っている事は否めないだろう。特に町というもの、風景というものの存在感が大きな揺らぎを見せている点などは著しい相似を見せていると言える。しかしながら、この場面は、先行する二つの「ネヴァ河の幻」とは全く異なる事を書いているのである。

この一節では、ラズーミヒンを訪れた帰途、御者に鞭打たれ、20コペイカを恵まれたばかりのラスコーリニコフについての記述の中に、以前、まだ大学生であった頃の、そしてまだ殺人を犯していない頃のラスコーリニコフについての記述が楔のように打ち込まれていることに注意しなければならない。大学生であった頃のラスコーリニコフは、大学からの帰途、このニコラエフスキイ橋の上で佇み、そこから眺められる「壮麗なパノラマ」に目を凝らす事を習慣としていた。その頃の彼は「自分がどこか上の方へ」飛んでいくような感覚を覚えたわけではなかった。ただ「ぼんやりとした解き難い印象」を、「陰気で謎めいた印象」を受けていただけなのである。ラスコーリニコフは、そういった印象の謎解きを「自分がそれを解けるだろうとは思わぬままに、将来へと先延ばししていた」。「百回ほど」この橋の上に佇み、その度に自分の受ける印象に一驚しながらも、その印象が掛ける謎を解く事を先へ先へと延ばして来たラスコーリニコフは、遂にその謎を解く事もないままに大学をやめ、金貸しの老婆アリョーナとその義妹リザヴェータを殺害し、強盗をはたらいてしまった。友人のラズーミヒンの下宿から帰宅する途中、馴染みのニコラエフスキイ橋の上に佇んだラスコーリニコフは「ある不安な、そして完全には明瞭でない考え」によって心を占められる。その「考え」が、「ぼんやりとした解き難い印象」や「陰気で謎めいた印象」を指しているのではないことは言うまでもない。「ある不安な、そして完全には明瞭でない考え」を説明的に受けているのは、犯行以前のラスコーリニコフの習慣を描く為には楔状に打ち込まれた叙述の直後に続く部分、すなわち「自分が以前と同じように同じ場所に立ち止まったということ、そして恰かも、自分が以前と同じように今も同じことを考えることが出来、つい最近まで興味を持っていたのと同じ、以前のテーマや情景に興味を持つことが出来るのだなどと本当に思ったのだということ——そのことだけをとりても、彼には奇妙で不思議なことに思われたのである」という部分なのである。そしてここで強調される「以前」と「今」は、犯行の「前」と「後」に他ならない。人を殺す以前に自分が受けていた「ぼんやりとした解き難い印象」

や「陰気で謎めいた印象」は、既に殺人者となったラスコーリニコフにとって無縁のものとなった。たとえ同じニコラエフスキイ橋の上に佇んでみても、今のラスコーリニコフは「以前と同じように」ものを考えることが出来ないし、かつて興味を持つことの出来た「以前のテーマや情景」に興味を持つことも出来ない。犯行によって、人を殺したというその事実によって、ラスコーリニコフは全く別人になっているからである。「ぼんやりとした解き難い印象」や「陰気で謎めいた印象」の謎を解く機会をラスコーリニコフは永久に失ってしまった。「ネヴァ河の幻」によって自らが得た「何か新しいもの」、「新しい世界」の「理解」や「洞察」を『弱い心』のアルカーヂイに与えたドストエフスキイは、殺人者ラスコーリニコフには遂にこれを与えなかったと言える。そしてこの「理解」や「洞察」を欠いているということこそが、『弱い心』や『ペテルブルグの夢』における「ネヴァ河の幻」と『罪と罰』における「ネヴァ河の幻」との決定的な相違なのである。

確かにラスコーリニコフは、アルカーヂイや『ペテルブルグの夢』の「私」とよく似た幻視体験をしている。だが、この幻視体験にしても、先行する二者と『罪と罰』のそれでは、実は正反對のことが描かれていることに注意しなければならない。『弱い心』及び『ペテルブルグの夢』では、風景が、都市が、そして世界が上へ上へと昇って行き、やがては消えて行くのに対して、『罪と罰』においては、上へ昇って行くのはラスコーリニコフ自身であり、「パノラマ」は犯行以前の彼や彼にまつわるすべてのことと一緒に「下の方のどこか深いところ」、「足の下の漸く見えるところ」へと消えて行く。雲散霧消して行くのは世界ではなく、ラスコーリニコフの方である<sup>14)</sup>。いわば、『弱い心』や『ペテルブルグの夢』では世界の存在感が希薄であるのに対して、『罪と罰』の「ネヴァ河の幻」ではラスコーリニコフの存在感が希薄なのである。

ニコラエフスキイ橋の上に佇む習慣を持ち、そこから眺められる「壮麗なパノラマ」が醸し出す印象の謎を解く機会があったにも拘らず、それを先延ばしにしているうちに、犯行に及んでしまったラスコーリニコフには、もはや目の前のパノラマも、かつての自分も、かつての自分が心を捉われていたものも、すべてが今の自分とは縁の無い遠い世界のことに感じられる。乞食のような風体の自分を哀れんでくれた母娘連れが「キリスト様の為に」と恵んでくれた20コペイカ玉を「じっと」見、「腕を大きく振って」ネヴァ河に投げ込む彼の行為は、この断絶感を積極的に引き受けようとする意志の現れであると読むことが出来よう。殺人によって捉われた、自分と世界との間の断絶感を抱えたままで、彼は以後の人生を生きて行こうとするのである。「この瞬間自分自身を、すべての人、すべての事から、われから袂で切り離したように、彼には思われた」——以後、『罪と罰』は、人を殺し、この世のすべてとの縁を絶ち切ったラスコーリニコフの孤独な闘争を描いて行く<sup>15)</sup>。

殺人者ラスコーリニコフを襲った断絶感が、「ネヴァ河の幻」によって「ある新しいもの」、「新しい世界」を「洞察」し得たアルカーヂイや「私」を襲うことが無いのは言うまでも無いことである。「理解」も「洞察」も無いままに自らの「忌まわしい夢想」<sup>16)</sup>を現実に移し、殺人を犯してしまったラスコーリニコフは、『弱い心』で言えば、同じネヴァ河を眺めてはいても、アルカーヂイではなく、むしろ夢想家ヴァーシャの血縁であると言える<sup>17)</sup>。「すべての人、すべての事」との結び付き無しに送られるラスコーリニコフの今後の人生は、顛狂院で朽ち果てるヴァーシャのそれと大差が無いのである。だが、ドストエフスキイは、ヴァーシャには与えなかった救済の



道をラスコーリニコフには用意していた。それがどのような救済であったか、また、それが本当にラスコーリニコフを救済出来るのか——これらは既に本論のテーマではないと言えよう。

#### 後 注

- 1) 『「罪と罰について」I』（新訂 小林秀雄全集、第6巻、新潮社、1978年、55頁）
- 2) 元来新聞の雑報欄を意味した「フェリエトン」（фельетон, feuilleton）は、ドストエフスキイが文壇にデビューした1840年代の半ばには、ロシアでは文学作品の一ジャンルとして既に認知されていた。時の話題を随意に取り入れた、町を散策するフェリエトン作家の機知に富んだ自由なおしゃべりという形式は、ドストエフスキイのみならず、彼と同世代の作家たちの多くが「その門を通過して来た学校」（Ю. П. Оксман）であった。特にドストエフスキイはこの形式に愛着を示し、1847年の4月から6月にかけて『ペテルブルグ年代記』と題された5編のフェリエトンを「サンクト・ペテルブルグ報知」に連載している。ドストエフスキイの創作活動においてこのフェリエトンというジャンルが果たしている役割については、B. Л. Комарович著、中村健之介訳『ドストエフスキイの青春』（みすず書房、1978年）所収の論文『ドストエフスキイのペテルブルク・フェリエトン』に詳しい。
- 3) Ф. М. Достоевский. Полное собрание сочинений в 30 -ти тт., Л., 1972-1990, Т. 13, с. 113. 尚、以下ドストエフスキイからの引用はすべてこのアカデミー版全集によるものとし、本文中の〈 〉内に巻数と頁数のみを示すこととする。  
中村健之介氏は、『弱い心』と『ペテルブルグの夢』における「ネヴァ河の幻」を、『罪と罰』ではなく、『未成年』に直結させ「若い日に得られた考えはなんと長く生きることか。そのことは、感覚的実体として洞察が得られたという強みだけではなく、それが作家の裡に下ろしていった根の広がり」と述べている。（中村健之介著『ドストエフスキイ・作家の誕生』みすず書房、1979年、117頁）。
- 4) ここではその例外としてB. Я. Кирпичинの見解を紹介しておく。彼は『罪と罰』の問題の箇所を『弱い心』と『ペテルブルグの夢』における「ネヴァ河の幻」に関連付け、『弱い心』のアルカーヂイがこの幻視の後ユートピア社会主義に身を投じるであろうと断じ、一方でラスコーリニコフは、アルカーヂイが見たのと同じ幻を眼前にしながら、アルカーヂイが信じたものに対する信仰の喪失、幻滅を感じているのだとした。筆者が目にした範囲では、「ネヴァ河の幻」を媒介とする『弱い心』と『罪と罰』の関係についての、聞くべきところの多い、最も深い意見である。しかしながら、キルポーチンとは1860年代前半の高揚した学生運動からの特異な脱落者としてラスコーリニコフを捉えようとしており、この基本的な見解に固執するあまり、『弱い心』と『罪と罰』で描かれた二つの「ネヴァ河の幻」の相違点に目をつぶってしまっていると言える。（B. Я. Кирпичин. Избранные работы в трех томах, Т. 3, с. 43-47, М., 1978）
- 5) 『弱い心』は、雑誌の新年号に掲載されることを考慮して大晦日から新年を時間的背景としている点、冒頭で「自然派」の作家たちの手法を軽妙に皮肉っている点などで、既にフェリエトンの特長を備えた作品であるが、それ以上に、『ペテルブルグ・フェリエトン』に登場した好色で強欲な50男ユリアン・マスタコフが温情溢れる上司として再登場して来ることによって、この小説のフェリエトンの出自は一層強調される仕組みになっている。詳細はコマロフ前掲論文を参照。
- 6) 言うまでもなく、ドストエフスキイ自身が夢想家的な気質を持った人間であったが、夢想家の登場する一連の小説を書いていた頃の彼は、夢想家の生活に対する批判的な視点を既に獲得していた。『白夜』（1848）の主人公である夢想家の「私」は、自身の夢想生活の破綻を予想する言葉を口にしてはいるが〈2—118—119〉、これなどもドストエフスキイ自身の偽らざる告白であると見ることが出来る。また、1847年1月から2月にかけて書かれた兄ミハイル宛ての手紙には、彼が夢想家というタイプについてかなり客観的な考察をしていたことを示す次のような一節がある。「(……) 外なるものは内なるものと均衡が取れていなくてはなりません。もしそうでなくて、外面的な現象を欠くならば、

内なるものは余りにも危険な優位を占めるでしょう。神経と幻想が存在の極めて多くの場所を占めることになるでしょう。ありとあらゆる外面的な現象が、不慣れな為に巨大なものに思われ、何か脅かしているように思われるでしょう。生活を恐れ出すことになるでしょう（……）」〈28. 1—138〉（圈点は原文でイタリック）。

- 7) 「（……）アルカーザイ・イヴァーノヴィチは絵じて話をするのが苦手であったが、夢想する（мечтать）などということも全く好きではなかったのである（……）」〈2—29〉
- 8) 後注4)で述べたように、В. Я. キルポーチンは、アルカーザイが「ネヴァ河の幻」を体験した後、ユートピア社会主義に接近して行くのだと主張している。だが、少なくとも『弱い心』という小説の枠内には（むしろ検閲への配慮ということもあるが）、そのようなことを暗示する言葉は存在しない。後述するように、アルカーザイの体験する「ネヴァ河の幻」が、作者ドストエフスキイの体験をそのまま描いたものであることはほぼ疑いを容れないとしても、そのことのみによって、アルカーザイが若きドストエフスキイと同じくユートピア社会主義者になるであろうと推測することには無理があるう。
- 9) この間の事情については、Н. Н. ストラーフの証言がある。〈19—262～263〉
- 10) 『ペテルブルグの夢』の中で「私」は、「ネヴァ河の幻」体験を語った後、シラーやホフマンに夢中になっていた自分の「アマーリヤ」という娘との恋と失恋、下級官吏を題材とするゴーゴリ的な作風への開眼、そして『貧しき人々』の人物像の発見を順を追って述べている。『ペテルブルグの夢』のこの部分の解釈については、次の拙論を参照されたい。『分身』の告白小説的性格とその展開（大阪外国語大学ロシア語研究室発行「ロシア・ソビエト研究」第15号、1989年）
- 11) 『弱い心』と『ペテルブルグの夢』の「ネヴァ河の幻」が同じものであるという指摘は数多いが、両者がほぼ同じ文章で書かれているということを明確に指摘しているのは、私見の限りでは中村健之介氏のみである（前掲書、115頁）。並べてみれば誰にも解ることをあらためて指摘することはあるまいとの考えからであろうが、同じ文章を二つの異なる作品で用いるということの異様さは、そのような不徹底さによって覆い隠されてしまうのである。尚、本論中の引用部分は筆者によるロシア語からの試訳であるが、ふたつの「ネヴァ河の幻」の文章が同じになるように訳したわけではない。日本語での一致は、原文のロシア語が一致していることを示している。参考までに、引用文2行目の「ネヴァ河に近付くと……」から「雲散霧消してしまうかのようであった」までのテキスト中、主語の変更によるのではない異同を以下に並記しておく。

『弱い心』	『ペテルブルグの夢』
<ul style="list-style-type: none"> <li>• минуту（ほんの少しの間）</li> <li>• кровавой（血塗れたような）</li> <li>• мглином（霧がかった）</li> <li>• загнанных насмерть（へとへとになるまで駆り立てられた）</li> <li>• отрадой сильных мира сего（この世の強者たちの喜びである）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• минутку（ほんの少しの間）</li> <li>• なし</li> <li>• мглистом（霧深い）</li> <li>• усталых（疲れた）</li> <li>• なし</li> </ul>

- 12) 1859年10月9日付兄ミハイル宛書簡の中で、ドストエフスキイは自分の作品集を刊行するという計画を述べている〈28. 1—349〉。彼がこの手紙の中で事細かに書いている作品集の構成案の中には、どういうわけか『弱い心』は含まれていないが、この時期のドストエフスキイが自分の旧作に手を入れる為に、かつての作品を手近に起き、もう一度目を通していたということは十分考えられる。
- 13) この「啞で聾の霊」について、江川卓氏はこの言葉が「ロシアを統べる皇帝・教会権力のシンボルめいた風景への、若きラスコーリニコフの異和感、無言の抗議」を表していると同時に、マタイ福音書やルカ福音書に登場する「悪鬼」、「汚れた霊」と同じものだとした上で、「つまり、ラスコーリニコフが眺めた「壮麗なパノラマ」は、実は地獄の景観そのものであり、作者の意識ないし意識下のど

ここには、まぎれもない「ペテルブルグ＝地獄」説がひそめられていたことになるわけなのだ」と述べている（江川卓著『謎解き「罪と罰」』、新潮社、1986年、91～92頁）。だが、『罪と罰』がまだ一人称叙述の「中編」として構想されていた時期に書かれた創作ノートの次のような記述に、江川氏の解釈は合致しない。

（……）この場所にはすべてのものを減らし、すべてのものの命を奪い、すべてのものをゼロに化してしまうある特性がある。そしてこの特性というのは、この風景の著しい冷たさであり、死の気配なのだ。全く説明の付かない冷気が、この風景からは吹き付けて来る。啞と沈黙の霊によって、「啞で聾の」霊がこのパノラマ全体にあふれている。うまく言い表せないのだが、ここにあるのは死の気配ですらない。なぜなら死ぬことの出来るものは、かつて生きていたものだけだからだ。だがここでは、僕の印象は抽象的だとか、頭でこしらえたものだとか、作り上げたものだとかいうものではなく、完全に直接的なものであったと僕には解る。僕はヴェネツィアも金角湾も見ただけではないが、そういった場所ではもうとっくの昔に生命が死に絶えているのであろう。石は依然として語り、依然として今に至るまで「泣き喚いて」いるにしても。（……）

< 7—39～40 >

言わんとするところの不明瞭な、解釈し辛い文章であるが、ラスコーリニコフが眼前のパノラマから感じ取っていたのは、「権力」や「地獄」などではなく、「かつて生きていたもの」の死ですらない死の気配、いわば絶対的な死の冷たさなのである。そしてこの死の気配は、かつて文明の中心地であった土地や「石」と共に表象されている点で、後にイヴァン・カラマゾフが体現するところの復活を伴わない不毛の死を連想させるものである。「石」によって象徴されるイヴァン・カラマゾフの不毛の死のイメージについては次の拙論を参照されたい。『アリオージャ・カラマゾフの死と復活』（ロシア・ソヴェート文学研究会発行「むうご」、第5号、第6号、1987年）

- 14) 「都市の浮遊」が「ラスコーリニコフの浮遊」に転換されて行く過程は、創作ノートに克明に見て取ることが出来る。1865年8月から10月の「中篇」時代の草稿では、該当する場所は次のように描かれていた。

（……）さて今この時に僕が習慣のせいでも立ち止まると、半時間前にラズーミヒンのところで僕の胸をふたいだのと同じ苦痛に満ちた感覚が、全く同じ感覚が不意にここでも僕の心を締め付けた。なぜなら僕には不意にこう思われたからだ。自分はもうこれから、ここであろうがどこであろうが立ち止まる理由はない、この風景がどんな印象を産み出そうと、僕にはどうでもよいことではないのか、今や僕には全く別の事柄があって、こういったことどものすべて、ああいった以前の感覚や興味や人々などすべての事柄は、まるで別の惑星にあるかのように、僕から遠く離れてしまっているのだ、と。（……）< 7—40 >

この段階ではラスコーリニコフが地上にいるのに対して、「すべての事柄」は、「別の惑星」にある。『罪と罰』が「中篇」から「長編」へと拡大されて以後の創作ノートではこの位置関係が逆転し、現行のテキストにはるかに近い形となる。

（……）だが（以前の印象を——松本）思い出すや、僕は僕が同じ場所に立っているというそのことさえも奇妙に思われた。どこか下の方の際限も無い深いところ、僕の足の下に、僕にはすべてが見えるように思われた、このパノラマも、以前の印象も、現在も、過去の一切も、何もかも、何もかも。僕はどこか上の方へと飛び去りつつあり、何もかもが僕の眼の中で消えて行くような気がした。（……）< 7—125 >

- 15) ラスコリーニコフが人類との断絶感を積極的に我が身に引き受けようとするこの場面を表現する為に、ドストエフスキイは文字通り彫心鑿骨の苦心をしている。1865年8月から10月の「中篇」時代の創作ノートでは、この場面は次のように描かれていた。

（……）欄干の上に身を屈めて立っていた僕は、手の内に施された硬貨を感じた。僕は手を開き、注意深く硬貨を眺めて、そしてそれから水の中に落とす。……）〈7—40〉

「それから水の中に落とす」の部分には、「完全に意識して落とす」、「何をしているか、完全に覚えながらではあるが」、「投げた」、「投げ落とす」といった異文が用意されていた。

同じ場面が、1865年10月から11月の創作ノートでは次のようにより詳しい描写に変えられている。

（……）片手を動かしてみて、僕は不意に自分の拳の中に握り締めた20コペイカ銀貨を感じた。僕は手を開き、硬貨を眺め、水の上に腕を伸ばして、手をすっかり開いた。硬貨は煌めき、水の中に消えた。[僕は]僕は見て、踵を返すと家路についた。（……）〈7—125〉

「水の上に腕を伸ばして、手をすっかり開いた」の部分は、後に「拳を開き、それを水の中へ投げた」に、また、「僕は見て」の部分は、後に「彼はすべての人をそれと（20コペイカ玉と——松本）共に葬ったかのようにであった」に書き換えられている。〈7—125〉ラスコリーニコフが自らの意志で20コペイカを捨てたのだということ、また、この行為によって、彼がすべての人類と絶縁したのだということをいかに表現するかという点に、作者の苦心はあったと言える。

- 16) 〈6—50〉ラスコリーニコフ自身の言葉である。

- 17) 『罪と罰』の初期の構想段階において、ラスコリーニコフのファーストネームが「ヴァシーリイ（Василий）」すなわち「ヴァーシャ（Вася）」であったということは、その意味で非常に示唆的である。『弱い心』の中では、アルカーヂイによる呼び掛けの言葉として「ヴァーシャ」がくどいほどに多用されている。「中篇」として構想されていた段階の創作ノートでは、人事不省に陥っていたラスコリーニコフ（ヴァシーリイ）の世話を焼くラズーミヒンが、ラスコリーニコフに対して、何度もこの「ヴァーシャ」という呼び掛けを繰り返しており、ラスコリーニコフへの保護者然とした態度と共に、『弱い心』のアルカーヂイを彷彿とさせている。共に夢の故に身を滅ぼすことになった二人のヴァーシャという観点から、ラスコリーニコフの人物像の原形を『弱い心』のヴァーシャに求めることが可能であるならば、登場人物の殆どが熱に浮かされているような『罪と罰』中の現実的な人間ラズーミヒンの原形を同じ『弱い心』のアルカーヂイに求めることもまた、可能ではないだろうか。